

原著 (Article)

オーストラリアと日本の小学校音楽科の比較研究 その 1

——学習指導要領の比較から——

**Comparison of Australian and Japanese Primary School
Music Classes (Part 1): Focus on the National Curriculums**

山本 朱莉*

YAMAMOTO, Akari*

山田 真紀**

YAMADA, Maki**

キーワード：音楽，小学校，学習指導要領，日本，オーストラリア，国際比較

Key words : music, primary school, National Curriculum, Japan, Australia, comparative study

1. 研究の動機と目的

日本の音楽の授業は、伝統的に知識と歌唱および楽器の演奏技術の修得に重きが置かれ、それが限界を迎えていること、また、授業方法も教師主導で、子どもが主体となる授業構成になっていないことが指摘されている。津田は、「子ども主体の授業が強調されながらも、圧倒的多くの時間では、教師主導の音楽授業の骨格が必ずしも大きく変わっているとはいいたいが現状がある」「音楽の授業は、伝統的に、歌を歌わせること、楽器を演奏させること、楽譜を読ませたりすることには、熱心であっても、子どもたちの豊かな発想を生かして授業を構成していこうという志向は希薄であった」「子どもたちの発想を授業にどう生かしていったらよいのか、益々問われつつある状況にある」と述べている¹⁾。また小島は、学習指導要領が「歌詞の内容を理解し、曲の感じを生かした声や曲想表現の工夫をする」「旋律の流れをとらえて、旋律を斉唱で美しく歌う」というように指導すべき内容が、活動の形で書かれているため、「どうしても活動をさせることに意識がいき、活動をうまくさせるための知識・技能を教えることになりがちであった」という問題意識を提示している²⁾。さらに、寺尾は、日本の学校における歌唱指導は、「演奏において技能がどのような役割をもつのかという脈絡と切り離されたところで、個々の基礎的技能が孤立的かつ画一的に扱われているところに問題がある」と指摘している³⁾。

そこで我々は、日本とオーストラリアの事例を比較することから、「音楽の知識と、歌唱と楽器の演奏技術の修得を目的とする以外の音楽の授業の在り方はどのようなものか」「子どもの創造性や感性が高まるような、子ども主体の授業はどうありうるのか」を中心に、新たな授業の改革案を探ることを目指した。オーストラリアを選んだのは、近年、先行研究が蓄積されており、情報が多いこと⁴⁾、日本の学習指導要領にあたる国家カリキュラムを持つこと、日本の夏季休暇中に南半球のオーストラリアで

* 椋山女学園大学大学院教育学研究科，大学院生 ** 椋山女学園大学教育学部/教育学研究科

椋山女学園大学教育学部紀要 投稿・執筆規程の2により査読を行った（2014年11月11日受付；2014年12月25日受理）

は授業を行っており、使用言語が英語であることから、参与観察が比較的容易であるからである。先行研究においては、唐崎はオーストラリアの音楽科が「芸術」という統合カリキュラムの下位領域に位置づけられていることに注目し、各州においてどのような形で芸術の諸領域が「統合」されているのかの研究を積み重ねている⁵⁾。井内は、実際に行われている音楽の授業に少しでも近づくために、楽典の基礎がどのような方法論で、どのように段階的に教授されているのかを教科書（指導書）を参照しながら分析している⁶⁾。しかしながら先行研究では、2014年から実施されている「全国統一カリキュラム」の分析を視野に入れていない。そこで、本稿では、以下の2つの作業を行う。第一に、新しいオーストラリアの「全国統一カリキュラム」を対象として、オーストラリアと日本における音楽科の国家カリキュラムの比較を行い、それぞれの特徴を明らかにすること、第二に、日本の音楽授業を改革する試みとして、オーストラリアの特徴を活かした授業案を作成することである。

2. 方 法

オーストラリアでは、1994年から国家カリキュラムが整備されてきたが、各州や直轄区が独自のカリキュラムを定めるうえで参考にする程度で、実際には州ごとに定められたカリキュラムの基準が用いられてきた。しかし2008年から「国家統一カリキュラム」の準備がはじめられ、2014年からはすべての州において、このカリキュラムに基づく実践が行われることになった。「国家統一カリキュラム」には、教科 Learning Areas/Subjects が8つあり、芸術 the Arts、英語 English、健康体育 Health and Physical Education、人文社会科学 Humanities and Social Science（下位領域に公民 Civics and Citizenship、経済とビジネス Economics and Business、地理 Geography、歴史 History）、言語 Languages、数学 Mathematics、科学 science、科学技術 technologies からなる。芸術は、ダンス Dance・演劇 Drama・メディアアーツ Media Arts・音楽 Music・ヴィジュアルアーツ Visual Arts の5つの領域により編成されており、音楽は芸術領域のうちの1つの領域という位置付けである。音楽のカリキュラムは、2008年から開発が始まり、2010年に芸術領域のカリキュラムの基準である「カリキュラムの構造：芸術領域 Shape of the Australian Curriculum: The Arts」⁷⁾が発行された。本研究では、オーストラリアの芸術領域の国家カリキュラムのうち、最初の概要の部分と、音楽について詳述されている部分を用い、日本の音楽の学習指導要領の音楽⁸⁾の内容と比較していく。なお、オーストラリアの音楽の国家カリキュラムの翻訳を、巻末に資料として掲載した。

3. 結果と考察

3-1. カリキュラムの比較

表1にオーストラリアと日本の音楽の国家カリキュラムの共通性と差異についてま

とめた。オーストラリアと日本の国家カリキュラムの特徴として、以下の3点をあげることができる。

① 音楽の授業の目的における差異

オーストラリアの国家カリキュラムでは、音楽は「音楽においては、自分や他者の作品を、構成し、即興演奏し、アレンジし、演奏し、処理し、反応するために、生徒は音楽の概念と素材を用いる」という書き出しから始まる。そして「音楽において学ぶのは、作ること、演奏すること、聞くことが相互に関連しているとき、もっとも効果的である。音楽の学習は、生徒がどんどん広がっていく深さや複雑さに対して、能力 skills, テクニック techniques, 知識, 理解を発達させ、それを繰り返すというように、音楽の学習は続いていくであろう」と述べられており、学年段階が上がるにつれて、扱う素材は複雑で高度なものになるが、音楽についての知識・技能を高める内容で構成されるという点は変わらないことが示されている。また、他の芸術領域に共通する項目において、「芸術はオーストラリアの主要な産業であり、地域生活の重要な部分を占めている。若者は重要な鑑賞者 audiences である。オーストラリアの芸術カリキュラムは、さまざまな形で、また適切な形で、若者に、プロの芸術家や芸術的組織との関わり合いを提供する」と述べられているとともに、「すべての若者に芸術を学ばせる基本的な考えは、職業的、というよりも基礎教育的なものであるが、専門家になりうる潜在能力を持つ子を見出し、芸術産業におけるキャリアの基礎を築くことも、学校の大切な役割である」と述べられている。ここから、オーストラリアの芸術は、主要産業である芸術を下支えする、素養ある消費者・鑑賞者を育てること、そして才能あるものを見出し、芸術の生産者を生み出すことを、その目的としていることが分かる⁹⁾。

一方、日本の音楽の学習指導要領は、冒頭の目標の欄で、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」と述べられており、音楽の授業の目的は、「心情」「感性」「情操」を育てることを、知識や技能を修得することと同じか、それ以上に大切にしようとしている。オーストラリアの音楽、あるいは芸術の領域においては、「心情」「感性」「情操」などの、子ども達の内面的・情操的発達に言及する記述はほとんどみられない。

以上のことから、オーストラリアの音楽の目的は、音楽の基礎的知識と技能を身につけさせること、それを通して、オーストラリアの主要産業のひとつである芸術産業を、消費者・鑑賞者として、時には生産者として支えていく人材を育てることを目的としている。すなわち音楽の学習自体がその目的となっているとともに、産業・社会を維持する手段ともなっている。一方、日本の音楽の目的は、音楽の学習自体が目的であると同時に、音楽は、感性や情操という人間形成のための欠かすことのできない手段ともなっている、と読み取ることができる。

表1. オーストラリアと日本の音楽のカリキュラムの共通性と差異

	オーストラリア	日本
国家カリキュラムの名称	カリキュラムの構造：芸術領域 Shape of the Australian Curriculum: The Arts	学習指導要領「音楽」 学習指導要領解説 音楽編
カリキュラム全体における音楽の位置づけ	8教科のうちの1教科の「芸術」。 「芸術」を構成するダンス・演劇・ メディアアーツ・音楽・ヴィジュアル アーツの5領域のうちの1領域	9教科のうちの1教科
音楽の目的	音楽に対する知識と技能を高める。 芸術産業の担い手を育てる。	表現及び鑑賞の活動を通して、音 楽を愛好する心情と音楽に対する 感性を育てるとともに、音楽活動 の基礎的な能力を培い、豊かな情 操を養う。
音楽の下位領域	作曲・演奏・鑑賞	表現・鑑賞
作曲に対する考え方	作曲をすることにより、必要な音 楽的知識を求める方法論。	音遊び、音楽づくりの活動。 音楽をつくる楽しさを体験させる。
伝統的な音楽に対する考え方	アボリジニ、トレス海峡諸島民の 理解（芸術5領域において共通し て強調される。）	国際社会に生きる日本人としての 自覚の育成。 我が国の音楽文化に愛着をもつ。
外国の音楽に対する考え方	オーストラリアとアジアとの関係 の理解（芸術5領域において共通 して強調される。）音楽の文化的・ 社会的・歴史的文脈を理解する。	他国の音楽文化を尊重する態度を 養う。

② 音楽の生産者としての子どもという位置づけ

オーストラリアの国家カリキュラムでは、子ども達は「作曲家」「演奏家」「聴衆」の3つの役割を担いながら音楽に参加する。なかでも、音楽の生産者としての「作曲家」という役割が重視され、準備級から2年生の欄は、「生徒は作曲者と演奏者と聴衆の異なる役割について学び、それに参加する。彼ら自身の音楽を作り出すために、声や楽器や音をもって探究したり演奏してみたりする。彼らは歌い、楽器を演奏し、音源を作り出し、音楽の範疇へ移動していく」という書き出しから始まる。3-4年生の欄では「シンプルな作曲を構成するために、音楽の要素を使い、また選択するにつれ、彼らは知識を積み上げていくだろう。そして、彼らは発明され、定式化された記号法を用いて、それらを記録するようになる」と述べられ、5-6年生の欄では「彼らは、自分の音楽的アイディアを計画し、構成し、記録するために、(中略)さまざまな科学技術 technologies を使う」「編曲者として、作曲家として、そして即興演奏者としての音楽の創造は、さまざまな音楽的な形式と分野に対する自覚を促す」と述べられている。オーストラリアでは、子ども達に生産者として音楽に関与させることで、既成の音楽を消費したり受容したりするのではなく、既成の音楽も自分が作曲するのと同じように他者が作曲した作品ととらえ、能動的に関わることを求め、また自

分自身の音楽を作り出し、記録するためには、音楽の知識や方法を知らないわけにはいけないという状況を作り出すことを意図していると見なせる。

一方、日本の学習指導要領では、音楽の授業は「表現」と「鑑賞」の2つの柱で構成されており、全学年において、表現の領域のなかに「音楽づくりの活動」があり、オーストラリアの「作曲家」に類似する内容が含まれている。「音楽づくりの活動」においては、低学年では「声や身の回りの音の面白さに気付いて音遊びをすること」「音を音楽にしていくことを楽しみながら、音楽の仕組みを生かし、思いをもって簡単な音楽をつくること」、中学年では「いろいろな音の響きやその組合せを楽しみ、様々な発想をもって即興的に表現すること」「音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、思いや意図をもって音楽をつくること」、高学年では「いろいろな音楽表現を生かし、様々な発想をもって即興的に表現すること」「音を音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、見通しをもって音楽をつくること」と述べられている。しかしながら、その目的について調べてみると、学習指導要領解説（音楽編）¹⁰⁾において「創作活動は、音楽をつくる楽しさを体験させる観点から、小学校では“音楽づくり”，中・高等学校では“創作”として示すようにする（4頁）」「生活の中にある音に耳を傾けたり様々な音を探したり音をつくったりして音の面白さに気付くとともに、音を音楽へと構成する音楽の要素や音楽の仕組みの面白さに触れるようにする（5頁）」「音楽づくりは、児童が自らの感性や創造性を働かせながら自分にとって価値のある音や音楽をつくる活動である（19頁）」と記述されており、「音遊び」「面白さ」「楽しさ」「感性」「創造性」という記述が散見されることから、その目的は、音と親しみ、感性や創造性を高めるためととらえることができる。

以上から、オーストラリアは子ども達を音楽の生産者であると位置づけ、主体的・能動的に音楽と関与させることで、より高度な音楽の知識と技能の修得につなげていくとする意図をもつところが特徴であるといえる。

③ 自国の伝統音楽と諸外国の音楽に触れること

オーストラリアの国家カリキュラムでは、概略において「オーストラリアや外国の音楽について、地域的に、国家的に、または国家を超えて学ぶことによって、生徒は、さまざまに文化的に多様な音楽の実践について理解し、関わり合いをもつようになるであろう」と述べられている。文化的に多様な音楽に触れるという記述は小学校段階では展開されず、中等教育段階（ハイスクール）の7-8年生の欄で「音楽の文化的・社会的・歴史的な文脈について、理解を始める」、9-10年生では「(前略) 音楽的作品や実践の現代的・歴史的な文脈についての豊かな知識を発展させていこう」、11-12年生では「現代オーストラリアや他の作曲家・演奏家の豊かで多様な音楽実践について、それらの実践が生まれた、地域的・国家的・国際的な伝統についても、理解と知識を示すだろう」という記述がある。以上の記述の内容から、オーストラリア国内の伝統音楽や外国の音楽に触れることは、異なる文化に触れる学習の一環という

よりも、音楽は文化的・社会的・歴史的な文脈のなかで生まれ、その背景を考慮しなければ正しい鑑賞はできないという音楽的素養の学習として位置づけられていると感じる。

一方で、日本の学習指導要領では「鑑賞教材」の例として、低学年では「我が国及び諸外国のわらべうたや遊びうた」、中学年では「和楽器の音楽を含めた我が国の音楽、郷土の音楽、諸外国に伝わる民謡など生活とのかかわりを感じ取りやすい音楽」、高学年では「和楽器の音楽を含めた我が国の音楽や諸外国の音楽など文化とのかかわりを感じ取りやすい音楽」を取り扱うと示されている。学習指導要領解説（音楽編）では、「我が国の音楽の特徴を感じ取りやすい和楽器による音楽、雅楽、歌舞伎、狂言、文楽の一場面などを含め多くの人々に親しまれている我が国の音楽、諸外国で多くの人々に親しまれ伝えられている音楽など、我が国の伝統や文化への理解を深め、諸外国の文化への興味・関心をもたせる音楽を教材として選択することが考えられる（80頁）」と述べられている。以上の記述の内容から、日本では、日本の伝統音楽や外国の音楽に触れることは、子どもたちが日ごろ接することの少ない伝統的な文化や諸外国の文化に触れる学習の一環であり、副次的に音楽の文化的・社会的・歴史的な要素について思いをはせることはあっても、その学習が主目的ではないといえることができる。

3-2. 「子どもは音楽の生産者」を意識した授業案

オーストラリアと日本の音楽の国家カリキュラムを比較することにより、両国において「音楽の知識と、合唱や楽器の演奏技術を高める」という目的を共通しても一方、オーストラリアでは音楽産業を支える素養ある消費者・鑑賞者を育てるという社会的機能が重視され、日本では、感性や創造性という人間形成機能が重視されるという違いを見出すことができた。この意味で、この研究が目的としていた音楽教育のオルタナティブを知ることができたといえる。さらに私たちは、音楽の授業を「歌唱や楽器演奏技術の教え込み」「教師主導」でないものにする、新たな授業構成のヒントを知りたいという願いを持っていた。その意味で、我々がもっとも関心を持ったのは、前節において2番目の特徴として示した、子どもを音楽の生産者としてとらえ、子どもは作曲をしながら、それに必要な音楽の知識や技能を身につけていくという方法論である。

国家カリキュラムの概略において「生徒は、音の長さ duration（リズム rhythm とテンポ tempo）、強弱 dynamics、形式 form、音高 pitch（旋律 melody と和声 harmony）、音色 timbre（音のテクスチャ¹¹⁾ sound texture と音質 quality）を含んだ、音楽の要素を学ぶ。生徒は、声、体、楽器、（石や家庭にあるものなど、自然界もしくは作られたもの）、情報機器（ICT）が発する音源など、音楽の素材に対し、この知識を適用するだろう」と述べられ、準備級から2年生の欄では「彼らは記号を通して音楽的な考えを記録するための方法を作り出し、探求するようになる」、3-4年生の欄では「シ

ンプルな作曲を構成するために、音楽の要素を使い、また選択するにつれ、彼らは知識を積み上げていこう。そして、彼らは発明され、定式化された記号法を用いて、それらを記録するようになる」と述べられている。つまり、作曲をするなかで、音楽を構成するさまざまな要素に気づき、また、それらを記録するための方法を編み出すなかで、これまで人類が創作してきた楽典の基礎について理解するようになるというのである。

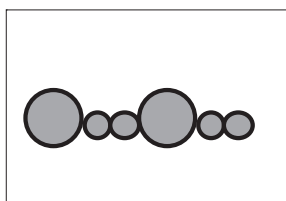
さらに、オーストラリアの国家カリキュラムでは「作曲家」「演奏家」「聴衆」の3つの役割が重視されており、準備級から2年生では「彼らは自身が作った音楽、他者が作った音楽に対し、反応し、コメントするようになる」、3-4年生では「彼ら自身の、あるいは他者の音楽において意味や音楽的な効果が作り出される方法について意見を共有する」とある。ここでいう「自身が作った音楽」は作曲した曲だけでなく、既成の楽譜を用いた合唱や演奏も含んでいると推測されるが、概略にも「音楽を学ぶのは、作ること、演奏すること、聞くことが相互に関連しているとき、もっとも効果的である」とあるように、特に作曲した場合は「作曲家」「演奏家」「聴衆」の3役割を演じることができるため、授業計画の立案においては、子ども達全員がこの3役割を担えるように工夫することにした。

我々はこの考え方を下敷きにして、4週間に渡って続く5時間完結の授業計画を立ててみることにした。対象は小学校2年生である。授業の進め方の概略は表2に示した通りである。

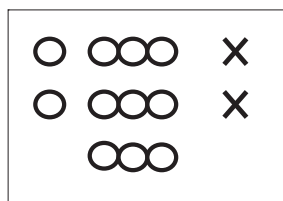
表2. 授業の進め方

時間	テーマと内容
1 時間目	<p>《身近なもので音を出して音楽を作ろう》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童がそれぞれ持参した「音の出るもの」の音を出して鑑賞する。 ・「音の出るもの」を使って、簡単な音楽を作る。 ・出来上がった音楽を数人が発表する。 ・作った音楽の記録の方法について考える。
2 時間目と 3 時間目	<p>《身近なもので音を出してみんなで演奏しよう》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループを作る。 ・グループで音楽を作る。 ・出来上がった音楽の記録の方法について考え、記録する。 ・記録を見ながら、音楽を再現する。 ・来週の発表会に向けて練習する。
4 時間目	<p>《グループ発表》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員は事前に音楽の記録用紙を全グループ分、一覧にして印刷しておく。 ・聴衆は「良い点」「改善点」「記録の工夫」について記入しながら聞く。 ・感想はあとで各グループにフィードバックする。
5 時間目	<p>《音符の役割について学ぼう》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が考えた「音楽の記録の方法」を参照しながら、音階とリズムの表記方法について指導する。 ・自分たちが作った音楽を、音符を使って表記してみる。

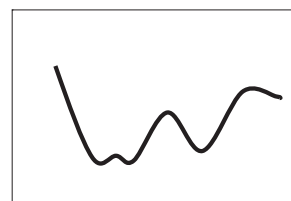
授業の準備として、音の出るものを探してくるという宿題を出しておく。音の出るものとは、楽器を含まず、家庭にあるもの、自然界のもので、無理なく子どもが学校に持参できるサイズのものとする。それぞれ持ち寄った「音の出るもの」を用いて1時間目を行う。1時間目は、4つのパートからなる。第一に、子どもがそれぞれ学校に持ってきた「音の出るもの」の音を出して鑑賞する。例えば、紙コップに砂を入れて振る、洗面器や鍋を棒でたたく、輪ゴムをはじいて音をだす、などが展開されることを期待する。第二に「音の出るもの」を用いて、楽しい音楽を作ってもらふ。即興で一回限りの音楽ではなく、何度も繰り返し再現できるような音楽を作ることを目指す。第三に、出来上がった音楽を発表する。発表したい子どもの気持ちを尊重しつつも、できるだけ「リズム」や「音の高さ」の要素を含む音楽を作った子に発表してもらうようにする。第四に、来週も同じ音楽が演奏できるように、今作った音楽をどのように記録するか、子どもたちに考えさせる。45分授業のうち、この部分に15分は割きたい。リズムであれば、○の大きさに強弱を、○の間隔の広さでリズムを表現するなど、音の高さ（音程）については、高い音は上に、低い音は下になるように、波線で表現するなどの様々な工夫が出てくることを期待する。仮に、ピアノなどを習っており、音符を使って表現しようとしている子がいても構わないことにする。記録の方法が思いつかない子どもには、友達のやり方を参考にさせてもらい、何らかの形で記録を取らせておく。これで1時間目は終了である。



リズムの強弱の表現例



リズムの間隔の表現例



音程の表現例

1時間目は、個人作業による作曲であったのに対し、2時間目と3時間目はグループによる作曲を行う。2時間目と3時間目は連続した2時間を用い、4つのパートからなる。第一に、1時間目に子ども達が持ってきた「音の出るもの」を参考にし、できるだけリズムと音の高さが組み合わせられるように5人グループをつくる。通常のクラスサイズであれば6～8グループできる。第二に、グループで音楽を作る。これも即興で一回限りの音楽ではなく、何度も繰り返し再現できるような音楽を作ることを目指す。第三に、曲を記録しておく方法についてグループで考え、できあがった曲を記録しておく。第四に、できあがった記録に基づいて、音楽が再現できるかどうか、もう一度演奏してみることで確認する。時間があれば来週の発表会に向けて練習を行う。以上で2-3時間目は終了である。教員は各グループの曲の記録用紙、すなわちオリジナルの楽譜を集め、それを一覧性のある資料へと構成し、児童にいきわたるよう

に印刷しておく。

4時間目は、発表会である。グループごとに作った曲を演奏していく。聴衆となる子ども達はオリジナル楽譜を見ながら演奏を聴き、演奏が終わると「感想カード」に記入する。各グループの音楽のよかった点、改善点、曲の記録の仕方についての感想を記入させ、後にフィードバックする。

5時間目は、子ども達が開発した曲の記録の仕方を参照しながら、世界共通で用いられている音階とリズムの表現の仕方について説明する。五線譜のどこかに玉を記入することで、7種類ある音階を表現すること、また玉を黒く塗りつぶしたり、棒と旗をつけたりすることでリズムを表現することを教える。世界共通の記録の方法であることから、楽譜があれば言語が異なっても同じ音楽が再現されること、などについても言及する。小学校2年生の図画工作では、身近のものを使って楽器を作る「わくわく楽器」の実践が行われているので、この単元を先に行い、作った楽器を用いてこの実践を行ってもよいだろう。

4. おわりに

本稿では、オーストラリアと日本の音楽の国家カリキュラムを比較することにより、両国において「音楽の知識と、合唱や楽器の演奏技術を高める」という目的を共通してもつ一方、オーストラリアでは音楽産業を支える素養ある消費者・鑑賞者を育てるという社会的機能が重視され、日本では、感性や創造性という人間形成機能が重視されるという違いがあることを明らかにした。さらに、教師の教え込みを排した子ども主体の授業づくりのヒントを得るために、オーストラリアのカリキュラムにおいて、子ども達は「作曲家」「演奏家」「聴衆」の3役割をもって音楽の授業に参加することが求められ、特に「作曲家」として音楽づくりに携わることで、音楽の基礎や知識を自ら求めていけるような仕組みになっていることに注目し、その特徴が明らかになるような実践計画を立ててみた。

これらの国家カリキュラムの特徴は、学校の日々の実践にどう反映されているのだろうか。次稿では、平成26年8月と9月にオーストラリアのシドニー市と日本の名古屋市で行った参与観察のデータをもとに、両国の音楽の授業の実態について紹介していきたいと考えている¹²⁾。

【参考資料1】オーストラリアの芸術領域の国家カリキュラムのうち「音楽」領域の全訳概略：

音楽においては、自分や他者の作品を、作曲し、即興演奏し、アレンジし、演奏し、指揮し、反応するために、生徒は音楽の概念と素材を用いる。生徒は、音の長さ duration (リズム rhythm とテンポ tempo)、強弱 dynamics、形式 form、音高 pitch (旋律 melody と和声 harmony)、音色 timbre (音のテクスチャ sound texture と音質 quality) を含んだ、音楽の要素を学ぶ。生徒は、声、体、楽器、(石や家庭にあるものなど、自然界もしくは作られたも

のが発する)音源、情報機器 (ICT) などの音楽の素材に対し、この知識を適用するだろう。生徒は作曲家、演奏家、聴衆としての特別な聞くスキルを発達させることにより、自分自身と他者の音楽について、イメージしたり、反応したりするだろう。生徒は、音楽と音楽的な考え方を交流させ、それを書き留めるために、記号法の形式を学ぶだろう。オーストラリアや外国の音楽について、地域的に、国家的に、または国家を超えて学ぶことによって、生徒は、さまざまな文化的に多様な音楽の実践について理解し、関わり合いをもつようになるであろう。生徒は音楽と音楽の実践の伝統や背景を調査し、自身や他者の音楽実践を批評するための技術やテクニックを発達させるであろう。音楽において学ぶのは、作ること、演奏すること、聞くことが相互に関連しているとき、もっとも効果的である。音楽の学習は、生徒がどんどん広がっていく深さや複雑さに対して、能力 *skills*、テクニック *techniques*、知識、理解を発達させ、それを繰り返すというように、音楽の学習は続いていくであろう。彼らは、聴覚芸術の形としての音楽に対する理解を深め、音楽と他の芸術教科との間の関連を探るようになるだろう。

準備級から2年生

生徒は作曲者と演奏者と聴衆の異なる役割について学び、それぞれの役割を担う。自身の音楽を作り出すために、声や楽器や音をもって探究したり演奏してみたりする。生徒は歌い、楽器を演奏し、音源を作り出し、音楽の範疇へ移動していく。音、歌、リズム、韻、メロディーのレパートリーを増やしていく。彼らは記号を通して音楽的な考えを記録するための方法を作り出し、探求するようになる。生徒は、音楽的な専門用語を使い始める。生徒は、さまざまな音楽的作品を聞き、それに反応し、彼らの聞くスキルを発達させていく。自身が作った音楽、他者が作った音楽に対し、反応し、コメントするようになる。

3-4年生

生徒は、作曲し、演奏し、自身や他者のパフォーマンスに反応するにあたり、発達しつつある聞くスキルと音楽的な専門用語を使う。シンプルな作曲を構成するために、音楽の要素を使い、また選択するにつれ、彼らは知識を積み上げていくだろう。そして、彼らは発明され、定式化された記号法を用いて、それらを記録するようになる。彼らは音楽的な概念への理解を示しつつ、歌い、楽器を演奏し、音楽へと進んでいく。自らの音楽的なアイディアを記録し、伝えるために、また他者の音楽的アイディアにアクセスするために、さまざまな科学技術を使う。表現し、聞き、作曲することを通して、生徒は、パフォーマンスにおける音楽的要素の使用について理解することができ、自身の、あるいは他者の音楽において意味と音楽的な効果が作り出される方法について意見を共有する。

5-6年生

生徒は、編曲し、作曲し、即興演奏し、音楽を表現するための、音楽的概念と要素についての深まりつつある知識を用いるだろう。彼らは、自分の音楽的アイディアを計画し、構成し、記録するために、また他者の音楽的アイディアにアクセスするために、さまざまな科学技術を使う。生徒の音楽的な実践は、音楽の記号法の深まりつつある使用、聞くスキル、音楽的専門用語によって支えられているだろう。編曲者として、作曲家として、そして即興演奏者としての音楽の創造は、さまざまな音楽的なスタイルとジャンルに対する高まりつつある自覚を示す。生徒は、歌と楽器向けの作品に関するますます多様となる音楽的レパートリーを演じることだろう。反応という点では、生徒は演じている音楽、あるいは聞いている音楽の核となる特質について理解することができ、また音楽的な好みについて情報が与えられた判断を下すことができるだろう。

7-8年生

生徒は、知識豊かな音楽の創造者、あるいは聴衆メンバーとして、音楽に関わるためのスキルと理解力を発達させていく。生徒は、さまざまな目的のために、編曲し、作曲し、即興演奏し、表現する。生徒は、音楽的な要素、素材、アイデア、スタイル、科学技術についての知識と理解を示す。生徒は、自身の、あるいは他者の音楽的なアイデアや作品を実現させるために、歌ったり、楽器を演奏したりする。生徒は、彼らの理解したものを伝えるために、音楽的な概念や専門用語を用いながら、自分自身の、あるいは他者の音楽的な作品や実践に対し、批判的に反応する。聞き、演奏し、作曲することを通して、生徒は、音楽の文化的・社会的・歴史的文脈について、理解を始める。

9-10年生

生徒は、音楽的な概念・言語・実践・科学技術・テクニックの深まった理解と利用をさらに発達させる。音楽的な実践を通して、生徒は、特有の個人的声を発展させ、さまざまな文脈において、音楽づくりに関わるようになる。作曲家としては、演奏家の音楽的なニーズと実践とを考慮にいれながら、さまざまな形とスタイルにおいて音楽的考えを生み出し、形づくり、洗練させていく。演奏家としては、ソリストおよびアンサンブルのメンバーの両方において、楽器と関連のあるレパートリーを使いこなし、選んだ楽器（声を含む）において技術と知識を示す。聴衆メンバーとしては、生徒は音楽の言語と概念を使いこなし、音楽に反応するだろう。調査や批判的学習を通して、音楽の作品や実践の現代的・歴史的文脈についての豊かな知識を発展させていくだろう。

11-12年生

生徒は、クラス内において、あるいはクラスを超えて、音楽的な概念・言語・実践・科学技術・テクニックに対する深い理解と使用を確たるものにし、広げていくだろう。作曲家として、あるいは演奏家（楽器演奏者、声楽者、指揮者）としての、生徒の音楽制作は、深まった音楽的なアイデンティティを示し、自分のコミュニティを超えた音楽的習慣や制度において知識とスキルを示し、責任のある倫理的な音楽の作り手・使い手としての役割に対する理解を示すであろう。生徒の音楽の実践は、広く、多様で、より音楽的に挑戦的なレパートリーを示すようになり、生徒は知識と実践の深くて幅広いレパートリーを示すようになるだろう。生徒は、情報豊かな音楽的な好みを示し、それをさまざまな音楽的な実践のモードや、マルチあるいはハイブリッド芸術を含んだ他の芸術の形態と関連づけたり、適用したりすることができるようになるだろう。生徒は、現代オーストラリアや他の作曲家・演奏家の豊かで多様な音楽実践について、それらの実践が生まれた、地域的・国家的・国際的な伝統についても、理解と知識を示すだろう。生徒は自分自身の、そして他者の作品に対し批判的に批評したり、議論したりすることを求め、それに関わるだろう。

■注

- 1) 津田正之「子ども主体の音楽授業への一視点—子どもたちの疑問調査を手がかりに—」『琉球大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』7号, 1999年, pp. 57-66.
- 2) 小島律子『新訂版 小学校音楽科の学習指導—生成の原理による授業デザイン—』廣済堂, 2011年, 9頁より。
- 3) 寺尾正「教員養成大学における歌唱の基礎的技能の捉え方とその指導法」『日本学校音楽教育実践学会紀要』第4巻, 2000年, pp. 114-123.
- 4) 唐崎裕子「オーストラリアの初等芸術科における統合カリキュラムに関する研究—ニューサウスウェールズ州 Creative Arts K-6 Syllabus の音楽分野に着目して—」中国四国教育学会『教育学研究紀要』55(2), 2009年, pp. 597-602.

唐崎裕子「オーストラリアの初等芸術科における統合カリキュラムに関する研究—クイーンズ

ランド州 Queensland Curriculum, Assessment and Reporting Framework の音楽分野に着目して」中国四国教育学会『教育学研究紀要』56(1), 2010年, pp. 67-72.

唐崎裕子「オーストラリアの初等教育における芸術科カリキュラムに関する研究—音楽分野を中心に—」広島大学教育学部音楽文化教育学講座『音楽文化教育学研究紀要』(22・23), 2011年, pp. 99-106.

井内志穂「オーストラリアの音楽教科書における基礎の内容に関する研究」中国四国教育学会『教育学研究紀要』57(2), 2011年, pp. 357-362.

井内志穂「オーストラリアの芸術科カリキュラム（音楽）における多文化教育の視点：初等段階に着目して」広島大学教育学部音楽文化教育学講座『音楽文化教育学研究紀要』24号, 2012年, pp. 159-169.

井内志穂「オーストラリアの初等音楽教育におけるテンポの学習内容に関する研究：Music Roomを中心に」中国四国教育学会『教育学研究紀要』58(2), 2012年, pp. 583-588.

井内志穂「オーストラリアの初等音楽教育における強弱の学習内容と方法：初等音楽教科書における基礎の内容に着目して」, 広島大学教育学部音楽文化教育学講座『音楽文化教育学研究紀要』25号, 2013年, pp. 155-160.

- 5) 唐崎裕子, 前掲論文。
- 6) 井内志穂, 前掲論文。ただし, オーストラリアには日本の検定教科書のようなものではなく, 参考書のような位置づけであり, さらに教科書を用いない授業も多い。
- 7) カリキュラムの構造：芸術領域（Shape of the Australian Curriculum: The Arts）Australian Curriculum, Assessment and Reporting Authority 発行, 2010年。全文は以下のサイトで参照可能である。
http://www.acara.edu.au/verve/_resources/Shape_of_the_Australian_Curriculum_the_arts_-_Compressed.pdf (平成26年10月17日接続確認)
- 8) 日本の学習指導要領は2008年に改訂された。学習指導要領の「音楽」の部分は, 以下のサイトで閲覧可能である。http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/on.htm (平成26年11月6日接続確認)
- 9) 「カリキュラムの構造：芸術領域」の「The Arts Industry and Community」の欄 (25頁)。
- 10) 『学習指導要領解説 音楽編』は以下のサイトで全文を閲覧可能である。http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afildfile/2009/06/16/1234931_007.pdf (平成26年11月10日接続確認。) なお, 出版されている『解説』と, インターネット上で閲覧できる『解説』では, ページのふり方が異なる。本論文中で示すページ数は, ここで示した URL で閲覧できる『解説』のものである。
- 11) 音の組み合わせから生じる総合的な印象を表す概念。
- 12) 山田真紀「オーストラリアと日本の小学校音楽科の比較研究 その2—音楽の授業の比較から—」椋山女学園大学教育学部『教育学部紀要』第8号, 2015年。